

宇宙は無限に蘇る — レチフの「自然学」 —

小 澤 晃

- I カフェの老作家
- II 物質的な神
- III 宇宙のライフサイクル—大転回
- IV 蘇る宇宙—不滅の個体

I カフェの老作家

ドイツの人文学者ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)は、1799年3月18日、滞在中のパリからワイマールのゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)に宛てて一通の手紙を書いた。云わく、あなたもシラーも気になってしかたがないという『暴かれた人間の心』の作家レチフ・ド・ラ・ブルトンヌと、カフェの一隅で、それもほとんど二人きりで、一晚語り合う機会を得ました。ついては彼に関するいくつかの最新情報を書き記すことにします。こう述べてフンボルトは、革命に翻弄されたあげく当時貧窮の極みにあり、精神にもいくぶん変調を来していたと覚しい、65歳の老作家レチフ・ド・ラ・ブルトンヌとの一夜の会見を報告する。一見とつきにくいその容貌とは裏腹に、意外に無邪気で率直な老作家の話しぶりにある種の感銘を受けながらも、知性の人フンボルトはこう述べる。「(...) それに対して、彼の談話はあまり人を惹きつけるものではありません。想像力の活発さに比べて、どうやら精神はあまり活動的ではないようです。彼のあれほど

出来事の多い人生も(…)口頭での表現能力を巧みにしてはくれなかったようです。それに彼はすぐ、まるで実もなければ啓発的でもない二つの話題に入り込んでしまうのです。一つ目の話題は(…)。二つ目のお気に入りの話題は、自分の哲学体系と自然学体系です。(…)少なくとも私は、こうした常軌を逸した逆説の中に、示唆に富んでいてしかも心理的にも興味深い主張や表現など何も見出すことはできませんでした。(…)こうした点や、他の特異さを別にすれば、この実際驚くべき人物に会うことは実に有益でありましょう。」⁽¹⁾

手紙の後段では、『暴かれた人間の心』(*Le cœur humain dévoilé*)、すなわち『ムッシュー・ニコラ』(*Monsieur Nicolas*)の読書から得た文学的感銘を隠さないフンボルトも、レチフの「自然学」の奇矯さには当惑を隠すことができなかったようだ。この時同時に話題にされた作品がレチフ晩年の、『死後の手紙』(*Les Posthumes*)や『囲い地と鳥』(*L'Enclos et les Oiseaux*)などであることを考慮すれば⁽²⁾、フンボルトの驚きと当惑は首肯できるものである。熱心に語ったというその「哲学体系」と「自然学体系」は、レチフが長い歳月をかけていとおしむようにして育み、数多くの著作の中でくりかえし執拗に語って倦むことのなかった、宇宙と人間についての信念であった。その信念は、進行する革命の激動の下で迎えた悲惨な老境において、極度に妄想化したのであった。フンボルトはその妄想的談話の犠牲者にさせられたのである。このほぼ10年後に、ドイツの近代学問制度の理念化に多大な貢献を為し、ベルリン大学の創設に奔走することになる、自由主義的人文主義者フンボルト⁽³⁾の眼に、レチフの「自然学」なるものが突飛で夢想的なものとして映じたにしても、驚くにはあたらない。その「常軌を逸した逆説」なるものは、明察のとおり、まさに夢想にほかならないのであって、とうてい、実験と観察を原理とする近代的な科学的知見になじむものではないのである。

しかし、その夢想性にも係わらず、レチフの「自然学」(*Ma Physique*)は、宇宙の全現象の解明を標榜する一個の統一理論であった。しかも後に見るように、どれほど「常軌を逸し」、荒唐無稽な記述に満ちていようとも、その教説はそれ自体においては一貫した論理構造をもつ包括的な体系なのである。そればかりか、十八世紀の統一理論の主流がそうであったように、また現代に至っては、ある種のマルクス主義的教説や、エコロジスト的、フェミニスト的言説がそうであるように、この「自然学」は、人間存在の起源の解明の後には、その行動規範を示す「道徳学」(*Ma Morale*)へと手を伸ばし、次いで、狂信から人間を護るためと称して「宗教」(*Ma Religion*)を論じ、最後には、もっとも望ましい政治形態を示さんがために「政治学」(*Ma Politique*)に至るのである。それは言わば、十八世紀の全問題に立ち向かってその解答を与えようとするか

のごとき歴大にして無謀な企図にはかならない。レチフはそうして蓄積してきた思考を、『ムッシュー・ニコラの哲学』と名づけて3巻にまとめ、自伝を標榜する全16巻の書物の続編とした。

もつとも、本稿は、そうしたレチフの夢想的ではあるが壮大な、自然的、人文的、社会的な思想サイクルの全体を扱うなどと主張するものではない。ここでは専ら慎ましく、そのファンタジックな思考の出発点を為すと同時に、その根底的原理ともなっている「宇宙論」のみに考察を限定し、これを比較的詳細に検討することで満足したい⁽⁴⁾。

II 物質的な神

キリスト教の狂信と不寛容を根底的に批判する武器として「啓蒙の世紀」に研ぎ澄まされた唯物論は、一切を、永遠的なものとしての物質に還元した。その思想の極限的達成として、たとえば、匿名で出版された、ドルバック男爵 (Baron d'Holbach, Paul Henri Dietrich, 1723-1789) の『自然の体系』(*Système de la nature*, 1770) がある。その、まさしく「過激」と形容するにふさわしい書物は、まず、自然の物質的一元性を根本的前提として措定する。しかる後に、フロギストン(燃素)の唱導者シュタール (Georg Ernst Stahl, 1660-1734) の物質観の濃厚な影響の下に、物質の自律的運動とその法則性を烈々と主張するものであった。一切が物質であるならば、自然に外在する超越神なる観念や、その超越神による世界の創造という観念、ましてや非物質的な魂などという観念は論理上否定される。そしてその思想の辿り着く極限の帰結は、当然のこととして、一切の妥協を排した徹底的な無神論にかならない⁽⁵⁾。

レチフはドルバックの『自然の体系』を読む以前にすでに、ある程度の唯物論的自然概念に親しんでいたようである⁽⁶⁾。『自然の体系』が出版された1770年、ただちに一読に及んだレチフは、その徹底した「無神論的」唯物論に烈しい反発を覚え、それへの反駁書を著そうとした。それは「奇想」(*Idées singulières*)シリーズ、いわゆる「～グラフもの」(～graphes)の第3巻として構想されたが、一枚の紙の裏と表に書かれた48頁分の原稿を残しただけで中断された。それは今日『ジェネオグラフ』(*Le Généographe*)として知られている⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

ドルバックも、また『ジェネオグラフ』におけるレチフも、自然全体が非生命的な物質の量的、機械的支配の下にあるというデカルト・ニュートンの宇宙観を拒絶し、物質の質的差異とその躍動する運動に惹かれるという点では一致

している。それにも係わらず両者を截然と分かちつもの、それは徹底的な神の存在の否定か、なにがしかの神的観念に固執するかという相異である⁽⁹⁾。レチフに烈しい反発を覚えさせたものは、『自然の体系』におけるドルバックの、その透徹した論理的考究の果てに行き着いたこの無神論であった。ましてや、後に見るように、レチフは「物質的である魂の不死性」という観念に執着するのであるから、この相異は決定的である。復元された『ジェネオグラフ』の表題に続く副題には、無神論者と見なされることを恐れる小心で奇妙な配慮がなされている。いわく、『ジェネオグラフ』(…)とりわけ神性と純粹知性、人間の魂(…)を強く説く。(…)唯物論者に対し、彼らの考えは、たとえ真実であるにせよ、神の存在を否定するなものをも証明しないことを示す(…)⁽¹⁰⁾。物質の一元的宇宙支配を主張することを目指しながら、同時に神と魂の存在を証明しようとするのは、唯物論的にはおそらく論理的に不徹底であろう。しかしその点にこそ、レチフ的唯物論の真の意味があるのは疑いえない。因みに、『自然の体系』はその徹底的無神論のゆえに、発表の年の1770年8月、パリ高等法院によって断罪された。その事件はドルバックの盟友である啓蒙派の多くを彼から離反させる結果を招いたのであった⁽¹¹⁾。

ともあれ、レチフの唯物論は、『ジェネオグラフ』を含めてこの時期に書かれたいくつかの著作に原型として示された後、修正と付加を経ながら、夢想性を濃密に保ちつつ精密化されていくことになる。その発展は必ずしも明瞭な形で著作から著作へと高まっていくものではない。それは今日では退屈な多くの「小説的」作品の中で執拗に論じられ、行きつ戻りつしつつ、うねるように高まって行き、1795年の『ムッシュー・ニコラの哲学』の巻頭に置かれた「我がが自然学」(*Ma Physique*)においてもっとも包括的で異様な形を取ることになり、最晩年の『死後の手紙』に至ってもっとも奇怪な妄想となるのである⁽¹²⁾。

ところで、レチフが自己の唯物論的探求を支えるために採用した方法は、他者の追認に耐えうるような科学的論理的証明を旨とする近代学問的方法ではなかった。それは、きわめて単純な観念を積み上げることによって組み立てられた、まことに恣意的な断定の連続にすぎない。もし、厳密性と論理性の不徹底によって組み立てられたにすぎないと目されるあらゆる立論が、空理空論として斥けられるならば、レチフの論述是最悪の思弁、最悪の空理空論として断罪されるほかはあるまい⁽¹³⁾。しかし思弁を排し、実験と観察によって仮説を常に更新していくという方法が、科学の唯一の方法となるのはまだ後のことである。そして、そのことによって人間は、世界についての思考の領域から、見えざるものをあたかも存在しないかのごとくに断定する倨傲を身につけたと同時に、何ものかを喪った。そのような文脈において見るならば、18世紀の自然に關す

る思想の大半は、まさしく思弁にほかならないと言えるであろう。しかしそれは、昔も今も、本来実験によって論証することのできない究極的な不可視の真実、あるいは人間にとっての真実に到達するための唯一の方法ではなからうか。レチフはまさしく思弁と想像によって自己の宇宙観を構築したのであり、そこに何の咎むべきものがあるだろう。

レチフが己れの思弁的想像力を支えるために採った唯一の正統的な哲学的手続きは、万能なる「アナロジー」であった。彼はその古来の方法を、無限大の宇宙から微小な生物に至るまでの存在の連鎖を、正当に解釈する唯一の方法だと確信していたのである (*M. N.*, v. 293-294)。ひとたびその万能の方法が採用されれば、残りの一切は次々に導きだされていくことになるだろう。

それではレチフの唯物論とはどのようなものか。中絶したとはいえ、『自然の体系』に反駁するために書かれた『ジェネオグラフ』は、この時期に書かれた『T**侯爵』 (*Le marquis de T***) や『アデル・ド・コマ***』 (*Adèle de Comm****) などの、とうてい生彩溢れるとは評しがたい「教育小説」 (*roman d'éducation*) などとともに、レチフの物質観、自然観の原型を成している。ひとまずここで、それらに依りつつ、レチフの思考を素描してみよう⁽¹⁴⁾。

レチフは反駁すべきドルバックの所説の多くについては、前述したごとくほぼ承認する。『自然の体系』の説く、物質の存在、その永遠性、その運動性など、唯物論の基本的な観念はレチフも進んで承認するのである。ただ一点、物質が盲目的運動をするだけの神なき世界という極限的観念においてのみ、ドルバックと袂を分かつのである。

レチフの宇宙論は、多くの思弁的宇宙論に例が見られるごとく、回転する天球の系列に属するシステムである (詳細については後に触れることにしよう)。そのシステム全体の特徴は、全宇宙の中心に自ら回転する「神的知性的太陽」という唯一の存在があり、その周囲を、それ自体が一個の中心であるもろもろの太陽が公転しているというものである。その全体的円運動を引き起こすものは、後に「エーテル」と呼びもする (*N. Ab.*, ii. 169)、宇宙全体に満ちている火の流体である。物質とは、その迅速に流れる流体がより濃縮された緩い相を現したものにほかならない。物質の四大要素、土、水、空気、火のうち、火こそがもっとも本源的なものである。なぜなら、火は運動と生命の源泉だからである。しかし、目的論的に見て運動はすべて盲目的であるはずがなく、「知性的太陽=神」から発する「知性」によって司られていなければならない。ところで、「すべては物質であ」 (*M. N.*, v. 206) るならば、その「知性」も物質的であり、従って神とは「知的流体」という物質にほかならない (*M. N.*, v. 152-

154)。神の物質性は完全に純粋なものであり、そこから個々の存在物に分有されるために「流出」する「知的流体」は、存在物の段階を順次下りながらその純粋性を少しずつ喪失していく。こうして完全な物質的自然内存在として規定された「神」は、物質の本源的属性からして宇宙の「運動」の第一原因であらねばならない。

ここでレチフの説く宇宙構造に戻ろう。

レチフは地球の回転という科学的常識から出発する。月は地球の周りを回転する。地球は太陽系の一惑星として太陽の周りを回転する。それならば当然、太陽系はそれよりさらに大きな太陽を中心とする別の系を公転しているはずだ。さらにその太陽系は別のもっと大きな太陽系を公転している…。この多重構造は原理的に終わりが無いから、宇宙は、従って、個別的と全体的との壮大な円運動の無限の運動体として理解されることになる (*Adèle*, iv. 253-254)⁽¹⁵⁾。しかし、その多元的同心構造宇宙が盲目的運動に陥らないために、そこにはすべてを秩序づける究極の中心がなければならない。それこそ、もろもろの太陽の中の究極の太陽、すなわち「太陽の中の太陽」であり、神的中心にほかならない。宇宙がすべて物質であるなら、物質の本性に則り、神的中心も運動する物質である。従ってそれは第一原因として、自ら回転運動を起こす。その運動が次なる回転を誘発し、さらに次なる回転が起こり、そのようにして宇宙に生じた無数の(言わばデカルト的)渦動によって、エーテルは局地的に凝集して天体と化す。なぜなら、回転運動は必然的に遠心力を生じ、その際、重い物質が中心部に集まり凝集するからである (*Ec. pères*, iii. 193-194)。こうして混沌としてのエーテルは、存在の連鎖と生命の段階性に貫かれた大いなる秩序と化する (*N. Ab.*, ii. 129, 210)。存在は神的中心から遠ざかるにつれ、分有する「知性」の純粋性を減じ、存在としての完全性の度合いを落としていく。

このきわめて単純な、ある意味では機械論的法則によって成立しているかに見える宇宙⁽¹⁶⁾を、レチフの宇宙論の第一段階とするならば、さらにそれを躍動的に記述した第二段階が存在する。それはいかにもレチフの面目を躍如とさせる、宇宙のライフ・サイクル論である。

III 宇宙のライフサイクル — 大転回

第二段階のその躍動的な宇宙とは、第一段階の言わば「定常的」宇宙論が発展して、誕生と死を宿命とする「生命論的」宇宙論、あるいは一種の「進化論

的」宇宙論に変貌したのだと言ってもさしつかえないかもしれない。しかも後に見るように、そしてそれがもっとも重要な点であろうが、レチフの夢想する宇宙は壮大な生命過程を経ていったんは死ぬが、そこから蘇生する宇宙でもあるのだ。そのようにして確立される信念は（本稿の扱う範囲を越えているが）、レチフの自然学的探求が地球上に向けられる時の原理となるのである。

さて、その夢想を紡ぐにあたって、彼が採用する方法は常に「アナロジー」であり、推論的思弁であった。なぜなら、レチフにとって、精神に快くない思考は悪であり、たとえ無根拠の妄想と嗤われようと、いやしくもアナロジーに基づきつつ存在の全体を貫き、「本当らしい」と受け取れるように組み立てられているならば、それはいかなる科学的観察にも計測にも優るものだからである。従ってレチフの思考は、同時代の正統的学者たち、たとえばビュフォンなどが提出したごとき、いずれ実験と観察によって実証ないし否定されるかする仮説としての「科学モデル」などではない。それは想像力が天空に飛翔して発見した、喜び溢れる人間的真理にほかならず、従っていかなる軽蔑にも非難にも揺るがないのである。そして本当に死を迎えるその時、レチフの半ば狂気と化した心はそれによって癒されるだろう。

さて、レチフの宇宙論の第二段階はすでに、1781に出版された『南半球の発見』第3巻 (*La Découverte australe, tome 3*) におけるメガパタゴニー人の賢者の言説として、そのエッセンスが示されている⁽¹⁷⁾。そして大革命が予感される1788年刊行の『パリの夜』第2巻、「第三十二夜」は、ほとんどすべての頁が「エジプト人の自然学」(*Physique des Egyptiens*) なる、神話と自己の思弁で紡ぎ上げた宇宙開闢説によって占められている (*Nuits*, ii. 278-370)。また、大革命の最中の1796年刊行の『ムッシュー・ニコラの哲学』は、レチフの第二段階の宇宙論を考える上でもっともまとまったものであり、頻繁に参照されねばならない。しかし、基本的に同一のテーマの論述が、反復されつつ螺旋的に深まっていくというその奇怪な構造のゆえに、読むものを当惑させずにはおかないのも確かである⁽¹⁸⁾。ともあれ、ここで、主としてそれらに拠りながら、宇宙の誕生と死を壮大に夢想するレチフの「活力説的宇宙論」⁽¹⁹⁾を見てみよう。

初めに誕生がある。

ところで、予め知っておかねばならないが、レチフの宇宙論においては、誕生と蘇生とは、循環するサイクルの始まりにして終りであるから、両者は論理上区別することができない。

まず、物質の一極集中が起こる。あるいは、それがそこに「在る」とも言えよう。全宇宙の中心である神、あるいは神的中心とも呼びうるし、またしかる

べき発生過程が経過した後は「太陽の中の太陽」とも呼びうるが、それはその定義からして、唯一にして全一なるものであり、端的に「存在するもの」である。そこには、宇宙の全物質が、すなわち宇宙の全エネルギーが、「知的流体」として凝集している。では、その神的中心たる太陽の物質性の本質はなにか。それは「火」である。しかもそれは焼きつくす火ではなく、「生命の熱」なのである (*Déc. austr.*, iii. 453)。そう断定してから、レチフは奇妙きわまりないトートロジーによってこう続ける。「太陽の火は、太陽に光と熱とを発せしめるその生命の結果であるにちがいない。なぜなら神の本性はそのようなものだからだ。あるいは燃える物質の、十分な堆積であるにちがいない。(…)太陽は熱いものであり、光り輝くものである。なぜならそれは、光と熱を拡散することが本性の大きな動物だからである。(…)『太陽』の物質とは物質的な微細な流体である。それは輝いて熱をもつ流体である」(*M. N.*, v. 154-155)。

いまだ若々しく活力に溢れた神である太陽は、火を本性とするその物質性と、宇宙の窮極的中心としてのその唯一性からして、自己のみにおいて回転する存在であり、烈しく熱と光を発する生命の根源である (*Nuits*, ii. 282-285)。しかも神は、その混沌たる物質的流体の中から、知的部分をすべて取出して雄となし、物質の残りの部分を雌となす。こうして自ら雄であり雌である単性生殖的存在と化した神は (*M. N.*, v. 282)、以後休みなく続けられていく「産出」の第一原因となり、いずれは、自らが運動化せしめたその生命サイクルの窮極において、産出されたものの一切を再び吸収することになる存在にほかならない。この神的中心による産出と吸収の循環こそ、レチフの宇宙論の大構造を成す基本過程である。

それでは、その個別過程はどのようなものであろうか。

その前提として、何よりもまずこう問うておかねばならない。なにゆえ神は不断に産出するのか。なぜなら、神にとって産出は快楽であり幸福であるから (*Nuits*, ii. 284-285) である。それでは、その快楽を好む神は「その知性で物質に働きかけながら何を産出するのか」。それは「もろもろの太陽」(*M. N.*, v. 283) である。ここにはレチフ特有の強烈な性的アナロジーを瞥見することができよう。

第一段階で提出された宇宙は、唯一の中心である太陽と、個々の中心を担うもろもろの太陽によって、多元的同心的宇宙に構造化されてはいるが、それ自体は機械論的に安定したシステムを成す宇宙であった。第二段階で執拗に語られる宇宙は、そのような安定的構造とは異質な、すべてが神的中心によって産出される、躍動的な生命的宇宙に変化を遂げているのである。「神は、排気でも

外在化でも流出でもなんでもよいが、それによって、自分に次ぐ下位存在であるもろもろの太陽を産出する」(M. N. v. 284)。なぜ神がそれらを産出するのかは、人間とのアナロジーが教えてくれる。神は、ちょうど人間が腸や手足を必要とするように、自分が行動するための手段として、それらを必要とするのである (M. N., v. 355-356)。

神の次位に位置する存在として産出され、神の手足となって働くもろもろの太陽は、父にして母である神とのアナロジーによって、それ自体、生殖力を備えた第二次産出者にほかならない。従って、それらは神と同様、周期的に、休みなく、えも言われぬ快感とともに、生きた物体を自分の中心の外へと放出、あるいは射精する。排泄物として太陽から放出あるいは射出されたそれらの物体は、彗星と呼ばれるのだ (Nuits, ii. 287-288)。だから彗星は太陽の熱を帯びた滓にほかならないのである。

レチフはビュフォンに多くを学びながらも、その惑星観と彗星観にははっきりと否定的な態度をとった。レチフにとって、「もろもろの天体や太陽や惑星が、死んでいる物質の集積である」(Déc. austr., iii. 449)⁽²⁰⁾ などということは、とうてい承服しかねる考えだった。そしてまさにこの「射出される彗星」とその「惑星化」のアイデアこそ自分の自然学の誇りうるところだと述べている。すなわち、「いかなる惑星も(…)惑星として生まれるのではない。それは彗星として生まれる」のである (M. N., v. 120)。正統的な学者であるビュフォンが、それについては「何も言うことができない」⁽²¹⁾ と述べた「彗星」こそ、レチフの生命的宇宙観の第三の登場者である。

「充滿する全運動の中心からむりやり放出された彗星は、初め、ほとんど真っすぐな線を辿る。人間には知覚できないその射出力の影響で、それは逃げ去っていく。しかしその遠心力は、ほかの二つの力、すなわち、物質の諸部分の明白な凝集源である粘着力と、太陽によってその系全体に伝えられる円運動力とによって、絶えず、邪魔される」(M. N., v. 121)。勢いよく直進しようとする彗星は、従って、遠心力と粘着力と円運動力という三つの力の合成によって、その直線軌道を少しずつ曲げられ、次第に元の方向に戻っていく。「もし戻るのが同じだとしたら、彗星は放出されたと同じ太陽の場所に戻ってきてぶつかってしまう。しかし、三つの力は、その組合せによってなにがしかの違いを生じる。その結果、彗星はもはや中心からかなり遠い所にしか戻って来ず、やむなくその周りを回ることになる」(M. N., v. 122)。こうして彗星は遠大な楕円軌道を疾駆する宇宙の旅人となるのだ。

しかし、すでに存在する惑星の軌道を次々と横切っては自らの広大な楕円軌道を進む彗星も、常に働きかける三つの力の合成力の影響で、次第に楕円の縦

方向をわずかずつ減じていき、そして膨大な歳月の後に、ついに他のいかなる惑星の軌道をも横切らぬもっとも外側の円周軌道を公転するようになる (*Femme inf.*, iii. 594)。自らが惑星と化したのである (*M. N.*, v. 122-123)。彗星は、あたかも蕩児のごとく、三つの力によって教育された挙げ句に大人となり、父にして母である太陽の元へ戻って、その周囲をおとなしく回転する、とでも言うべきであろうか。こうして彗星はいずれすべてが惑星と化すのであり、地球も同じプロセスを経て惑星となったのである。

この段階に至って、天体の性分化が生じる。レチフはすでに早くから、能動と受動、軽いと重いなどの対立原理によって、前項を雄、後項を雌とする考えを抱いていた。神的中心の、および、もろもろの太陽の、雌雄同体的な性分化の観念も、同じ対立原理に拠ったものであった。この原理をさらに延長すれば、親なる太陽から射出されたばかりで、まだ「神的知性」を十分に備えている勢いの盛んな彗星は雄であり、次第に「知性」的エネルギーを失いつつ「物質性」に偏していき、ついには惑星と化して太陽の周囲を廻るようになったものは雌となるのである。宇宙空間におけるその両者の軌道の不意の交錯的接近遭遇は、あたかも性交のようであり、その天体的「交接」の結果、衛星が生まれるのだ、まるで子供のように (*M. N.*, v. 267, 285)。

レチフのアナロジー万能の思考法によれば、すべては互いに「雛型であり、原型であり、似姿」 (*Nuits*, ii. 303) であるから、彗星／惑星も子供として生まれたからには、成長するはずである。その一生には「遅しく強い時期があり、賢く慎重になり、最後には衰え」 (*Nuits*, ii. 304) の時期がそれぞれあるだろう。そして最後には、生命を燃やし尽くした果てに終焉を迎えるほかはない。「惑星は生まれるのだから、死ぬはずだ。惑星に関して、生まれるとは彗星として太陽から出てくることであり、死ぬとは惑星としてそこに戻ることだ」 (*M. N.*, v. 124)。

ただし、惑星の死にも二つの種類があると考えねばならない。すなわち不慮の事故死と老衰による自然死である。

事故死とは、惑星と彗星が互いの交錯する軌道上で衝突することである。不幸にもそれはままたま起こることである (*Nuits*, ii. 292)。彗星のほうのはるかに小さく弱い場合は、惑星に吸収されて一体化するのみであるが、もし彗星が惑星よりはるかに大きく強力な場合はそれではすまない。仮にそれが単なる接近遭遇であるなら、衛星を生むことになるだけだが、交錯する軌道が完全に一致して衝突した場合は、彗星が惑星を運び去ることになるのだ (*Nuits*, ii. 300-301)。

しかし幸い、大部分の惑星は、もうひとつの死、すなわち老衰による自然死を迎える。すなわち、事故にも遇わず、あたかも人間が百歳の長寿を迎えることがあるように、彗星も、無事、太陽を廻る円軌道に乗った惑星と化して、穏やかな生涯を歩むことができる (*Nuits*, ii. 302)。しかし、生きるものすべての宿命からして、惑星もいずれは自らの最期を迎えねばならない。

それではその老化による自然死はどのようにして訪れるのであろう。

すべては他のすべての原型であり似姿なのだから、地球を見れば他の惑星のことがわかる (*M. N.*, v. 117)。地球の現在の姿から推し量るならば、この段階に至るまでの間に、惑星は太陽から受け取ってきた神的生命の源である「熱」を、彗星の段階に比べて、はるかに多く失っているはずである。なぜなら、地球で見られる基本的な岩石類はすべて、ビュフォンやデカルトやライブニッツの主張するような(高温上昇を原理とする)ガラス化によってではなく、「冷却結晶作用」、換言すれば「低熱結晶作用」によって形成されたからである。従って、その冷却化の過程とはまさに、遙か神的中心から授かってきた生命力そのものにほかならない「熱と光」を喪失する過程である。その喪失が大きくなればなるほど、それだけ生命の度合いは低くなっていく。故に、冷却化の進行はまさに、惑星にとって、生物学的な意味における老化と同義である。原理的存在である「神」を除けば、いかなるものも永遠的でも安定的でもありえないのだから、惑星は冷却化によって衰亡への緩慢な過程を歩んでいくのである。この、あたかも閉鎖系における熱の不可逆性を示唆するようなイメージは興味深い。惑星は言わばエントロピーの増大によって、衰亡への過程を歩んでいくのである。

その具体的な過程は、軌道の縮小螺旋化である。すなわち、惑星は生命力を喪失していくにつれ、安定した軌道を維持できなくなり、狭まりつつ次第に太陽に近づく螺旋軌道を回り始める。 (*M. N.*, v. 117)。そしてついには自分を産み出した太陽に近づき、接触し、吸収される (*Nuits*, ii. 303)。この縮小螺旋化を、地球を例にして、レチフは異様に執拗な計算によって仮定的に説明する。その計算の結果、わが地球は太陽に衝突するほどに軌道が縮小するには、あと「五千二百五十七万世紀、すなわち5,257,000,000万年ある。けれども、そこから一千万年ほど取り除かねばならないと思う [すると五十二億四千七百万年になる]。その時には、地球は中心からあまり離れてはいないだろうから、たぶんもうすでに分解されていることだろう」 (*M. N.*, v. 125-126) というのである。もちろん、それは純然たる仮定だと断りつつも、レチフは、その目も眩むような時間の彼方の、地球の運命を予想し、アナロジーによって、それを他のすべての惑星の運命として想定する。

そして地球を含めたすべての惑星はついに、螺旋化の極まった果てに、自らを産出した親の元へ落下し、親である太陽は「それを吸収し、分解し、自分の物質の中に混合させる (*Femme inf.*, iii. 595) のである。もっとも、「太陽にとって、一惑星を呑み込むことなどなんでもないことだ」(*M. N.*, v. 376)。しかし次々に近付いて落下してくる惑星を、呑み込んで分解し、混合させる作業の連続は太陽を衰弱させる。太陽は次第に自転速度を落とし、惑星の半数ほどを吸収する頃には、熱と光がきわめて少なくなっている。最後のひとつを呑み込む時には、弱々しくほとんど活力も失ってしまう。そしてついに、新たな彗星を射出することも、落下してきた惑星を呑み込むこともできなくなった時、太陽は自然死を迎える (*M. N.*, v. 376-377) のである。

こうして衰弱死を迎えた太陽は、今度は自らが「太陽の中の太陽」たる「神の中心」へと落下していく。これが宇宙の個別の「転回」(*révolution*) であり、この様相は宇宙の全域で、もろもろの太陽のすべてにあまねく生じるのである。こうしてもろもろの太陽たちは、その大きさや惑星の数によって生じる死期のズレの故に、一挙にはではなく、次々と継起的に、「神」という存在原理の中へと落下していく (*M. N.*, v. 377)。これこそ宇宙全体が最終的に示す「大転回」(*grande révolution*) にほかならない。大転回は、宇宙のすべての物質を「神」のもとへと返してその全過程を完了する。

IV 蘇る宇宙 — 不滅の個体

レチフの夢想した宇宙の大構造は以上のごときものである。そのバロック的と形容しうる奔放な想像力は、個別転回から大転回に至る一連の躍動する運動体としての宇宙の姿を、その性的な属性までをこめて、生き生きと描出する。いったん閉じたその円環は、しかし、新たな転回の始まりを潜在させて息づく生命体なのである。宇宙は、そのライフサイクルの始点でもあり終点でもあるこの「神の中心」に戻って、そこから再びその全運動過程を開始しようとしているのだ。

『ムッシュー・ニコラの哲学』の第一部「自然学」に述べられたその「蘇り」の経緯は、特有の行きつ戻りつする論述のために、即座にはその論理を把握しにくいのであるが、これを、いくぶん敷衍しつつ、了解しやすい直線的な論旨に組み立て直してみると、以下のようなになるだろう。

古代のアラビア人は、自からの死から復活する存在を「フェニックス」と名付けたが (*Nuits*, ii. 311), まさにその「鳥」こそ、自分の「神」を象徴するものとしてふさわしい、とまずレチフは考える。すなわち「神、つまり偉大なるパン、つまりフェニックスは、唯一の中心であり、すべてである」(*M. N.*, v. 377)る存在なのだから、「大転回」の結果再び自分の元に帰したこの生命性全体にほかならないところの、「混沌、つまり全体的混淆を、巧みに操作して、一種の自然休止を為し、巧みに自らを一新する」(*Ibid.*)ことができる、と想定するのである。

続けてレチフはこう述べる。この宇宙全体を孕んで息づく再吸収の段階は、神の死の時と見えないこともない。しかしこれは生命が消滅したのではなく、神の知性を分与した個別存在を外部に顕現させていない、というだけである。

(*op. cit.*, 383)。「神は全生命、全知性を持っているのだから、死んでいるといっても、それはただ、ことごとく吸収されつくした個別存在についてのみ、死んでいるというにすぎないのだ」(*op. cit.*, 377-378)。神である「フェニックスは、自分を焼き尽くし(つまり、自分の中に、個体区分なしに、宇宙のすべての火を閉じこめ)、そして自分の灰という生命の塩から再び生まれる」(*op. cit.*, 383)。宇宙のすべての生命の火を摂りこんで、蘇りの潜勢態にあるフェニックス、というこのイメージは美しい。

こうして復活する若々しい神は、「初めは何も産出しない。これは、一種の休息状態の中で、その《自我》を己れの内部に感じとるために、神が全生命力をそのために用いていることを意味する」(*Ibid.*)。そして神は成人し(*Ibid.*)、「次なる瞬間、すべての衰えた古い個体に再び活気を与え、生命を浸透させ、常に新たなる自分の若さに与らせるのだ。なにしろ、神は精力そのものであり、それらの古い個体を噛み砕き、自分の中で消化した後で、再びそれらを力強い流動性のものと為し、またそれらに、かつてそうだったものを、再びそうなるべきものを、産み出す能力を持たせるのである。」(*op. cit.*, 378)。

こうして神は再び、「大いなる動物、《全なるもの》である自分の手足、すなわちもろもろの太陽を産出」(*op. cit.*, 383)して、宇宙のライフサイクルを再開する。そしてまたもや、それらの太陽に休みなく彗星を射出させることによって宇宙に自己の生命を分有させつつ、無数の転回と唯一の大転回へと収斂していく過程を歩み始める。この「全体的大転回は、あまりにも長いものだから、書きつづける数字では表現できない。次のも前のと大体同じ長さになる。永遠というのは、この連続する無限の転回でできているのだ」(*op. cit.*, *M. N.*, v. 378)。

それでは人間は……。この常に死に常に蘇る宇宙の中で、神性を分与された

マクロからミクロに至る全個別存在、すなわち宇宙の全生命体系とアナロジーによって繋がれた人間はどうなるのであろうか。レチフは執拗にそのことを考え続けた。

初め、それは諦念に満ちた一種の達観論の様相を呈する。結局、死とは「体のすべての部分の運動停止であ」(*N. Ab.*, iii. 432)り、それを惹き起こすのは「個体を構成している物質間の均衡の欠如」(*Ibid.*)である。宇宙の全物質は質的に連鎖しているのだから、死によって分解されたすべての個体は「地球の諸要素へ、地球を通して太陽の諸要素へ、太陽を通して神の諸要素へと戻っていく」(*M. N.*, v. 423)はずである。結局、宇宙の全物質の量に変化はないのだから、ひとつの個体の死は、「普遍的物質の様態に微かな変化が生じること」(*P. P. perv.*, ii. 506)にすぎず、それは善でもないし悪でもない。唯物論を信奉する者として、魂の物質性を確信していたレチフは、死の瞬間、魂は、神という宇宙の知性的物質性の混沌の中に帰還する、と考えるだけで満足していたのだった。

この達観論はしかし、個体の完全な消滅という恐怖の前で崩壊する。なぜなら、一度分解された物質の組合せが、再び自然によって同一的に再現されるとは考えにくいことであり、「腐敗は色々な部分を分解します。自然は自分が造った個体をもう保持できなくなり、大急ぎでそれを腐敗によって破壊し、他の個体の形で生命を返す」(*Adèle*, iv. 335)ことになるであろうからである。もしすべての個性が再現されないとすれば、人間も個体として再現されず、従って、靈魂は再来せず、再受肉もなく、ひとりの人間の同一性は永遠に喪われる。これがレチフを捉えた恐怖だった。すべてを物質の運動とその組合せの偶然の結果だとするドルバック(*M. N.*, v. 281)に対して、レチフが激しい敵意を燃やした理由もそこにあるだろう。

しかし、とレチフは執拗に考える。自然は大きな循環性によって成り立っているのだから、個体にもやはりなにかの循環性と、それによる再生がなければならぬ。死による個体の永遠の消滅を回避しようとして、レチフは懸命に思弁を展開する。そして個体の近似的再生という考えに執着するのである。それは単純な論理による慰めにしかすぎないが、古代のカルデア人の知恵に感嘆しながらレチフはこう考える。「自然にとって、人類はただ一人の人間にすぎない。人類の分子は無限にあるのではない。今日の男や女を構成している分子は、ルイ十三世時代やルイ十四世時代初期の人間たちを構成していたものなのだ。たぶん、人類全体と、今いる動物や植物を構成するのに必要な分子の、三、四倍が辛うじて存在しているのだらう。それらがすべて河のように通りすぎて、大海に注ぎ込む。それがまた汲み上げられ、雨となって、山を潤し、水源がまた水を供給し、河がまた同じ姿で現われる。こういうわけだから、人間は、同

じ個人ではなくとも、カルデア人が言うように、やはり永遠の存在なのだ」(*M. N.*, v. 150-151)。

この地球規模の物質の流れを、アナロジーによって全宇宙に拡大すれば、たしかにレチフの考えた宇宙の永劫サイクルは成立する。そして、唯物論的な論理の枠内で成立するのはここまでである。論理の飛躍によらないかぎり、人はこれ以上先へ進むことはできない。潔癖な唯物論者なら、ここで立ち止まって、生きとし生けるもの、存在するものの、物質的宿命を甘受する覚悟を決めることだろう。しかしレチフは、この個体の近似的再生という程度の考えでは満足することができず、次第に、同一個体の回復、全人格の不死性という考えにとり憑かれていく。

『ムッシュー・ニコラの哲学』第二部「道徳学」の「まえがき」として書かれた「自然学の要約」で、レチフは「一回の大転回で存在したものはすべて、次の大転回でも、同じ秩序で、存在するだろう」(*M. N.*, vi. 17)と断定する。そして、ものに憑かれたかのように、まったく同種の断定を「結論」でも繰り返す、「各大転回のたびごとに、ものみなすべては、同一のものとして、同一の秩序で再開する」(*M. N.*, vi. 143)のだ、と。

この断定を支えるためには、何かしら妄想的な飛躍がなければならない。実際、その論拠はきわめて素朴な楽観論にすぎないのである。「なぜなら、それらをもたらした原因は最善のものなのだから、従って必然的だからだ」(*Ibid.*)。これはほとんど論理の体を成していない夢想的願望にすぎないのである。しかしレチフの夢想は、逆にほとんど恐ろしいとさえ言える決定論的思考でこう続ける。「この考え方は(…)私には、偉大で美しいものと思える。転回のたびごとに、すべては、かつて永遠にそうであったと同様に、再び形づくられるだろう。同じ太陽たちが、同じ彗星たちが再び生まれるだろう。そして惑星の上では、同じ動物、同じ人間が生まれるだろう。こうして今のすべての人間は個別に同じものとして存在するだろう。同じことが行なわれるだろう。同じ副次的転回が同じ原因で起こるだろう」(*M. N.*, vi. 143-144)。この同一物の永劫の繰り返しは、すでに、慰めであるよりは、悪夢に似ている。

そして、夢想は次第に連禱に似てくる。「我々は今と同じ点にいることだろう。この私、ムッシュー・ニコラは、同じ過ちを犯すことだろう。同じ不幸を嘗めることだろう。同じ浮気女どもに騙されることだろう」(*M. N.*, vi. 144)。その一切の愚行を含めて「我々は不死である。永遠である」(*Ibid.*)、とレチフは思う。そしてまたや論法は循環して、「知的で全能で、従って在るものである原理存在は、必然的に最善のものであるはずだ。ところで、最善のものは必然的に神のように唯一なるものである。だから、過去の諸転回においても、未

来の諸転回においても、すべては今の転回と同じだろう」(Ibid.)。そして、その慰めの極みに、「自然はいつも同じだ、もろもろの太陽の形成もそうだ。それらはすべて、熱く光輝く球体で、同じ性質だ」(Ibid.)とレチフの想像力は語りかける。こうして導かれた論理に従えば、個人(個体)の過去は完璧に戻ってくることになるだろうし、これこそ、レチフが「願望的論理」によって辿りついた最終的な地点だった。すなわち、すべては幾度でもやり直すことができる。レチフの用語に従えば、すべては幾度でも、よりよく「生き直す」ことができる、と。

以上のような、宇宙の大構造とその無限反復、そこから導かれる個体の不死性というレチフの観念は、それ自体がその奇怪な魅惑によって人を惹きつけずにはおかないものであるが、その出発点ともなり、また帰結点ともなった原理が、疑いもなく、彼のもろもろの奇怪な社会改革論、冗長な小説群、そしてまことに印象深い「自伝」のすべてを内的に規定しているのである。それらは、到底、本稿のような小論で扱いうるテーマではない。

本稿は、いくぶん過度に、レチフの思考の「妄想性」を強調しすぎたかもしれない。そのために、言わばそれが狂人の妄想、あるいはたわごとであるとの印象を与えたとしたら、急いで修正しておかねばなるまい。というもの、レチフは確かに「素人哲学者」として自己流に咀嚼しすぎるきらいはあるものの、十分に当時の学問的知見に通じていたのであって、そのことは、『自然学』第3部の三分の二ほどを成している(M. N., v. 467-564)「私以前の著者たちによる《世界の体系》諸説」(Systèmes du monde, tiré [sic] des auteurs qui m'ont précédé)を一瞥すれば分かることである。そこにおいてレチフは、古代中国、古代エジプト、古代ギリシャ、古代インド、ヘブライ等々の神話的言説と区別なく、フォントネル、デカルト、ライプニッツ、ド・マイエ、ピュフォン、リンネ、ラ・メトリー、ラプラス、ミラボー、デュポン・ド・ヌムール、ラヴォワジエ、などといった、前世紀および同時代の人物の諸説を総覧し、論評しているのである。ただレチフにとって、すべからく学問的仮説というものは、精神に快いものでなければ意味がなかったというにすぎない。もちろん、科学的仮説というものが、実験と観察によって常に更新されうるという手続きを除けば、なんら「妄想」と選ぶところがなく、と言ったら言い過ぎであろう。しかし、D. カワードが述べていること⁽²²⁾を敷衍して言えば、レチフが「自然学」で展開した、物理学、天文学、地質学、海洋学、動物学、植物学、そしてそれらの原理としての唯物論と生命科学は、どれほど奇矯で秘教的な色彩を帯びてい

ようとも、十八世紀の科学が古代的段階から近代的段階へ移行するための過渡期において示したパノラミックな思考の、ひとつの表現であることは間違いない。

註

レチフ作品の引用は、《LES ŒUVRES COMPLETES DE RESTIF DE LA BRETONNE, 207 tomes, réimpressions des éditions de Paris-Genève, etc., 1767-1889. Slatkine Reprints, 1988, Genève》に拠る。ただし、『ムッシュー・ニコラの哲学』は、近代版が流布しているという理由から《*Monsieur Nicolas, ou le cœur humain dévoilé*, 6 tomes, Jean-Jacques Pauvert, 1959, Paris》の第5巻 (tome 5), 第6巻 (tome 6) に拠る。

本稿において直接引用し、文中各所に括弧付きで示した作品名は、次の略号によって示す。その際、小文字のローマ数字は巻番号（『パリの夜』については、部番号）を、アラビア数字は頁を示している。

- ・ *Adèle* : 『アデル・ド・コマ**』 (*Adèle de Comm***, 5 tomes)
- ・ *Déc. austr.* : 『南半球の発見』 (*La Dévouverte australe*, 4 tomes)
- ・ *Ec. pères* : 『父親学校』 (*L'Ecole des pères*, 3 tomes)
- ・ *Femme inf.* : 『不実の女』 (*La femme infidèle*, 4 tomes)
- ・ *M. N.* : 『ムッシュー・ニコラー』 (*Monsieur Nicolas, ou le cœur humain dévoilé*, 6 tomes)
- ・ *N. Ab.* : 『新アベラール』 (*Le Nouvel Abeilard*, 4 tomes)
- ・ *Nuits* : 『パリの夜』 (*Les Nuits de Paris*, 16 parties)
- ・ *P. P. perv.* : 『墮落百姓兄妹』 (*Le Paysan et la paysane perversis*, 4 tomes)

I

- (1) James Rives Childs, *Restif de la Bretonne. Témoignages et Jugements. Bibliographie*. Aux dépens de l'auteur. En vente à la Librairie Briffaut, Paris-VI^e, 1949, p. 41.
- (2) *loc. cit.*
- (3) 佐々木力, 『科学革命の歴史構造』(下巻) 所収, 「ドイツ近代大学建設と科学思想」(313~324頁), 岩波書店, 1985年。
- (4) このテーマについては既に、筆者の編訳に係わる、レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『当世女』(筑摩書房, 1990年) 巻末の, 解説II-2「女性と生殖的宇宙観」に略述した。しか

し、編訳書の解説という性格上、残念ながら十分な密度をもって論述することはできなかった。本稿はその不備を補おうとするものである。

ところで、今日ようやく端緒が開かれたレチフ研究において、これまでに並はずれて豊かな先導的成果をもたらした研究者は、フランスのピエール・テスチュ (Pierre Testud) と、イギリスのデイヴィッド・カワード (David Coward) の二人である。前者は大著『レチフ・ド・ラ・ブルトンヌと文学創造』(*RETIF DE LA BRETONNE et la création littéraire*, Librairie Droz, Genève, 1977, 729 p.) と、「プレイヤッド叢書」版『ムッシュー・ニコラ』(*Monsieur Nicolas, 2 vols*, Gallimard, Paris, 1989) の百科事典的注解によって、レチフ解釈の正統を樹立した。後者はこれまた大著『レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの哲学』(*The Philosophy of Restif de La Bretonne, Studies on Voltaire and the Eighteenth Century* 283, University of Oxford, 1991, X-878 p.) によって、レチフにおける学問的・理論的テーマを包括的に論じた。今後、レチフについていかなる者がいかなることを語るにも、この両者のモニュメンタルな研究に依拠しないことは不可能であろう。それを怠って、十九世紀以来の歪んだレチフ像を流布し続けることは決して容認されることではない。筆者も両者の多大の恩恵に浴していることを当然ながら認めねばならないし、本稿はとりわけカワードに多くを学んでいることを率直に述べておきたい。

II

- (5) ドルバック、『キリスト教暴露』(*Le Christianisme dévoilé*, 1761) の邦訳 (野沢協訳, 現代思想社, 1968年) に付された、訳者による綿密な解説を参考にした。及び, D'Holbach, *Système de la nature*, 2 tomes, in 《Corpus des œuvres de philosophie en langue française》, Fayard, 1990. を参照した。
- (6) D. Coward, *op. cit.*, p. 407.
- (7) P. Testud, *op. cit.*, pp. 195-196.
- (8) *Le Généographe*, edited by Dennis Fletcher, in *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century* 170, 1977. Introduction, pp. 129-163. Text, pp. 165-234.
- (9) *Ibid.*, pp. 142-143.
- (10) *Ibid.*, p. 165.
- (11) 前掲, ドルバック『キリスト教暴露』邦訳, 解説, pp. 209-210.
- (12) D. Coward, *op. cit.*, p. 410.
- (13) *Ibid.*, pp. 412-421.
- (14) D. Fletcher, *op. cit.*
- (15) この辺りの記述の整理は, カワード, 前掲書, pp. 423-425を参考にしている。
- (16) D. Coward, *op. cit.*, p. 425.

III

- (17) なおこの巻の末尾には、付録として、古今の宇宙創世説 (*Cosmogénies, ou Systèmes de la Formation de l'Univers, suivant les Anciens et les Modernes*) の紹介と論評が載せられている。なお、本書には抄訳であるが(といっても本文386頁、解説等およそ70頁という綿密なもの)、次の邦訳がある。『南半球の発見』、植田祐次訳、創土社、1985年。
- (18) その他に、『新アベラール』 (*Le Nouvel Abeilard*) 第2巻, pp. 169-199。『父親学校』 (*L'Ecole des pères*) 第2巻, pp. 191-197なども重要である。
この部分の記述は、テキストを逐一参照しながら、D. カワードの前掲書や、L. ロティの「文化的進化、政治的進化、そしてレチフ的諸転回(革命)」 (*Laurent Loty, Evolution culturelle, évolution politique et révolutions rétiviennes*, in *Etudes rétiviennes* no. 2, pp. 3-18, 1986) などを参考にしてしている。
- (19) 「活力説」という語は、*vitalisme* の訳語としては現在では一般的ではないかもしれない。しかし「生氣論」という訳語の狭い生物学的な印象を筆者は好まないため、一貫して「活力説」ないし「活力論」を用いることにする。
- (20) なお、次の研究を参照した。
ジャック・ロジェ、『大博物学者ピュフォン——18世紀フランスの変貌する自然観と科学・文化誌』、ベカエール直美訳、工作舎、1992年 (*Jacques Roger, Buffon, un philosophe au Jardin du Roi*, Librairie Arthème Fayard, 1989), 143-145頁。
T. S. ホール、『生命と物質』(上・下巻)、長野敬訳、平凡社、1990年(上巻)、1992年(下巻) (*Ideas of Life and Matter — Studies in the History of General Philology, 600 B. C. -1900 A. D.*, The University of Chicago Press, 1969), 下巻10-20頁。
- (21) J. ロジェ、前掲書、145頁。

IV

- (22) D. カワード、前掲書、435頁。

(1993年5月1日稿)